



障害児教育における教具に関する研究： 認知に関する教具分類のための一試案

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学旭川分校障害児教育研究室 公開日: 2017-07-26 キーワード: 作成者: 諸岡, 裕記, 木下, 裕美, 木村, 美香 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007752

障害児教育における教具に関する研究

——認知に関する教具分類のための一試案——

諸岡裕記*・木下裕美**・木村美香***

心身に障害をもつ子どもの指導には、幅広い角度から子どもにより適した課題や教具が選択されなければならない。しかし、それらに関する総合的な検討は、まだ十分なされていない。そこで、「発達水準」「発達課題」と関連させながら「教具」を整理しようと試みた。まず、子どもの発達をとらえるために、「基本的生活習慣」「社会的行動」「運動」「言語」「認知」の発達傾向表を作成し、今回はそこから「認知」領域をとりあげて、「感覚と運動の統合」という視点から発達の質的なレベルをとらえ、それを6水準に区分してみた。つぎに、各水準における主な発達課題を整理するとともに、それに基づいた教具を対応させて、この領域における教具分類のための手順を試みた。そのため、まず市販教具約470点について整理をおこない、今後必要とされる分類のための基礎的作業をおこなった。このことから、感覚と運動の統合がすすんでいる子どもに適する教具が多く、また、どのレベルの子どもにも適するといった複数の役割をもったものは少ないという傾向がみられた。

さらに今後、こうした事例や実践をとおしながら「発達水準」「発達課題」「教具」のそれぞれについて具体的な対応関係をつかみ、構造をとらえるとともに、一人ひとりの子どもに適合した実践といった創造的な営みから、子どもの発達が教具をとおしてどのように促され、いかに変容していくのかについて検証していかねばならない。

(キーワード：教具，発達傾向，発達課題)

1. はじめに

障害児教育において、発達上の課題や学習上の問題を解決していくために、数多くのアプローチがなされ、そこからたくさんの教具が作りだされてきた。そして、今日その数は膨大なものとなっている。

しかし、それらの教具については、系統的な分類が確立されておらず、いくとおりの整理・区分が便宜上なされているだけにすぎない。この分野の研究は、子どもの発達や発達上の課題などとの関連を有機的にとらえながら、追求し改善をくわえつつ、総合的な視点から検討されなければならないであろう。

そこで、本研究は、子どもの「発達水準」と「発達課題」に関連づけて「教具」を整理することによって、子どもの状態や特性にあった教具とはなにかを明らかにし、さらに改善・工夫するための方法をみいだすことをねらいとしている。

具体的方法として、次のことをおこなった。

- ① 子どもの一般的な発達過程をとらえるために、「基本的生活習慣」「社会的行動」「運動」「言語生活」「認知」の5領域からなる発達傾向表を作成した。

- ② 今回は、5領域の中から「認知」領域をとりあげ発達をさらに質的なレベルからとらえなおし、それを6水準に区分した。
- ③ 6水準に区分された「認知」領域の各水準ごとに主な発達課題を整理した。
- ④ さきの発達課題に対応する市販教具について整理した。

以上のことをとおして、子どもの発達を促すためにより有効な方法が明確なものになると考えた。

2. 発達傾向表

さきに述べたが、発達傾向表は一般的な発達の様子を幅広くとらえるため複数の資料に基づいて整理し、このことから、さまざまな子どもの状態像をよりの確につかむことができるように作成した。

作成には、次の9種類の資料を活用した。

- 1) 遠城寺宗徳・合屋長英ほか：遠城寺式・乳幼児分析的発達検査表(九大小児科改訂版)、慶応通信
- 2) Gesell・Amatruda, 新井清三郎訳：新発達診断学、精文堂
- 3) 北海道旭川盲学校編：発達段階チェックリスト
- 4) 小林芳文：MEPA、日本文化科学社
- 5) 中根 晃・石戸谷栄一・田中美郷・鈴木昌樹：言語発達の障害、安田生命社会事業団
- 6) 津守 真・稲毛教子：乳幼児精神発達質問紙1～12か月まで：1～3歳まで、大日本図書
- 7) 津守 真・磯部景子：乳幼児精神発達質問紙3～

* 北海道教育大学情緒障害教育教員養成課程
旭川市立大有小学校

** 北海道教育大学情緒障害教育教員養成課程
小樽市立北山中学校

*** 北海道教育大学情緒障害教育教員養成課程

7歳まで、大日本図書

8) S.ブルーマ・M.シェアラ・A.フローマン・J.ヒリヤード著・山口 薫訳：カード式ポータジ乳幼児教育プログラム、主婦の友社

9) W.K.Frankenburg原著・上田礼子著：日本版デンバー式発達スクリーニング検査、医歯薬出版

これらに基づいて、教育実践で活用しやすいものとするために、前述の資料にほぼ共通している5領域を選択し、それを表1のように細分化することによって子どもの日常生活をとらえやすくした。また、年齢は0歳から7歳までとし、比較的是やく現われる子どもの行為・行動(項目)から順に並べ、それを年齢ごとにまとめた。したがって表1はその全体構造と各領域に含まれる項目数について示したものである。

表1. 発達傾向表の各領域と項目数

領域\年齢区分		0	1	2	3	4	5	6	7	合計
基本的生活習慣	食事行動	25	18	9	5	7	7	0	0	71
	排泄行動	0	9	5	10	4	0	0	0	28
	着脱行動	1	13	9	8	7	3	1	0	42
	清潔・衛生行動	2	6	6	10	6	2	5	0	37
	安全行動	0	0	1	2	3	3	0	0	9
社会的行動	表出・対人行動	43	30	13	15	18	9	10	0	138
	遊び・模倣	8	12	9	13	11	7	4	0	64
運動	粗大運動	61	28	12	24	14	14	3	10	166
	微細運動	33	15	19	10	15	15	1	1	109
言語生活		50	42	45	40	35	31	13	1	257
認知		46	25	21	44	28	31	8	0	203
合計		269	198	149	181	148	122	45	12	1,124

これらの領域を内容的にみると、次のとおりである。

(1) 基本的生活習慣

日常生活における最も基本的なことから5つに分けた。〔食事行動、排泄行動、着脱行動、清潔・衛生行動、安全行動〕

(2) 社会的行動

他人との生活や相互交渉に関することから2つに分けた。〔表出・対人行動、遊び・模倣〕

(3) 運動

おもに大筋が関与するものと、小筋が関与するものとに分けた。〔粗大運動、微細運動〕

(4) 言語生活

表出言語と理解言語に関することからまとめた。

(5) 認知

初期の感覚受容やその反応からはじまって物を弁別したり知的な判断を必要とすることからまとめた。

表2は、そうした発達傾向表を作成した中からその1例として「言語生活」0歳の一部を示したものである。

表2. 発達傾向表「言語生活」0歳

年齢	項目
0歳	・音によって反応がみられる。(聴覚による反応→ドアの閉まる音などにビクッとする。)
	・元気な声でなく。
	・口のあたりに触れると、唇を閉じてすぼめる。
	・音や声に対して、四肢や顔や目を動かす。
	・舌をならすことなどを繰り返す。
	・動くものを目で追ったり、注意を向けてじっと見る。(追視反応・注視反応)
	・声を出す。 (「アー、ウァー」等の泣き声以外の発声をする)
	・いろいろな泣き声を出す。
・機嫌の良いときは、「アー」「ウー」「エー」の声を出す。(喉音)	

3. 認知領域における発達水準

さきの傾向表は、5領域に分けて子どもの発達過程を年齢ごとにまとめたもので、数多くの状態像から、子どもの発達に適した課題をみだすことは難しい。そこで、発達を質的なレベルからとらえ子どもの行動と発達課題、それに対する教具の関連構造をうきぼりにしなければならない。

発達については、さまざまにとらえ方があるが、比較的具体的であって実践的と思われた、宇佐川 浩著「感覚と運動の初期発達と療育」(全国心身障害児福祉財団)を手がかりに、ここからさきの課題に取り組むことにした。

今回は、5領域に分けた中からまず「認知」をとりあげた。それはこの領域が単なる反射的な行動から、より高次で知的な判断を必要とすることからまでを含み、「運動」と並んで発達全体にかかわる重要な位置を占めるものであり、この領域に関する教具が数多くみうけられたためである。

宇佐川による、感覚と運動の統合という視点から「認知」領域を6水準に区分したが、各水準の内容は、次のとおりである。

(1) 感覚入力水準

目や耳からの感覚受容が運動表現とつながりにくい状態である。外界からの刺激の受容と運動表現とのつながりが確かめにくい。

(2) 感覚運動水準

対人・対物的なかかわりのなかで自発的な運動表現が多くなり、それに目や耳が追従していることもある。外界の受容は運動をとおしておこなわれることが中心

となる。

(3) 知覚運動水準

少しずつ目や耳が運動に同調しますが、まだ完全にそれによって運動を調整していくまでにはいたらない。

(4) 知覚水準

目や耳によって運動表現が制御・支配され、予測的・調整的な行動が多くなる。また、弁別能力も高まり模倣行動も活発になる。

(5) 象徴化水準

象徴化・記号化による運動表現がでてくる。ことばの理解も深まり、言語も獲得されてくる。

(6) 概念化水準

事物の関連づけ、抽象化・構文の理解・産出、文字・数字などの概念の成立がこの水準において可能となる。以上の発達水準を、本研究では便宜上、次のように呼ぶことにする。

感覚入力水準→第1水準 知覚水準→第4水準

感覚運動水準→第2水準 象徴化水準→第5水準

知覚運動水準→第3水準 概念化水準→第6水準

このような視点から「認知」領域の発達傾向表をとらえ直したものが、表3である。

表3. 発達水準による傾向表「認知」

発達水準\年齢\	項	目
第1水準	0	・触れた物を握っている。
	0	・手を開いたり閉じたりする。
	0	・物音にビクッとすする。(ドアの閉まる音等)
	0	・音のした方に、首をまわす。
	0	・手を口にもって行って、しゃぶる。
	0	・見た物を目で追う。(ガラガラ、顔等)
	0	・機嫌の良いときは、辺りを見回して、声を出したり、手足を動かしたりして一人で遊ぶ。
	0	・抱かれて歩くと、辺りをきょろきょろ見回す。
	0	・ガラガラ等を、少しの間握っている。
	0	・顔に布をかけられると、手で取りのける。
	0	・ガラガラを振ったり、ながめたりして遊ぶ。
	0	・哺乳時に、母親の衣服の衿等を引っ張ったり、触ったりする。
第2水準	0	・自分の手をじっと見ている。
	0	・両手の指をからみ合わせたりする。
	0	・体のそばにあるおもちゃに手を伸ばす。
	0	・体のそばにあるおもちゃに手を伸ばして、つかむ。
	0	・おもちゃを差し出すと、直ちに手を出して、つかむ。
	0	・いろいろな物を、両手で口に持っていく。
	0	・抱かれたとき等、大人の顔をいじる。
	0	・そばで人が新聞を読んでいると、引っ張って破る。
	0	・ボタン等、小さい物に注意を向けていじる。
	0	・持っている物で、テーブル等をたたく。
	0	・ひもを振って、おもちゃの音をだす。
	0	・物を落として、落ちた場所をのぞく。

水	0	・もう一つの物を取ろうとして、物を一方の手から他方の手へ持ちかえる。	
	0	・タンスの取っ手やテレビのスイッチ、鍵等で遊ぶことを好む。	
	0	・物を、何度も繰り返して落としたり、拾ったりする。	
	0	・おもちゃの電車等を、手で走らせて遊ぶ。	
	1	・水いたずらを好む。	
	0	・容器に手を入れて、物を取り出す。	
第3水準	0	・真似をして、容器に物を入れる。	
	0	・指さすと、言葉で促されると、容器に物を入れる。	
	0	・容器に物をいれ、容器を逆さにして、からにする。	
	0	・両手に持っている物を、打ち合わせる。	
	0	・おもちゃよりも、食器等の日用品で遊ぶことを好む。	
	0	・自分の体の部分を注意して見る。	
	0	・床に落ちている小さな物を注意して拾う。	
	0	・引出しをあけて、いろいろな物を出す。	
	0	・容器の下に物を隠されると、捜し出す。	
	0	・戸を開けることがわかる。	
	0	・汽車のように並べた3個の積木を押す。	
	0	・型はめ板から円型をはずす。	
	0	・言われると、丸いペグをペグボードにさす。	
	0	・ボールを投げられると、投げ返す。	
	0	・言われると、簡単な動作を1つする。(手をたたく等)	
	水	0	・箱、びん等のふたを、開けたり閉めたりする。
		1	・なぐり描きをする。
		1	・高いところから、物を落とすことを好む。(二階、ベランダ、窓等から)
1		・小さな物を、コップ、びん等に入れて出したりする。	
1		・聞かれると、自分・人形等の身体部位を指さす。(1~2か所程度)	
1		・積木を2~3個重ねる。	
1		・おもちゃを、ひもで引っ張って歩きまわる。	
1		・砂いじりを好み、砂を容器に入れて出したりして遊ぶ。	
1		・コップからコップに、水等を移す。	
1		・鉛筆等で曲線を描く。(ぐるぐる丸を描く)	
1		・全く同じ物を照合する。	
1		・なんでも自動車に見立てて、押して歩く。	
1		・母の掃除をしているのを見て、真似る。	
1		・いろいろな物を、紙、布等に包んで遊ぶ。	
1		・おもちゃの電話のダイヤルを回して、「もしもし」という。	
1		・人形をおぶったり、抱いたりする。	
1		・「~ちゃんはどこ?」と聞かれると、自分を指さす	
1		・実物とその写真を照合する。	
1	・絵や写真の中から言われた物を指さす。		
1	・絵本のページをめくって、言われた絵を見つける。		
2	・ままごと道具を、いっぱい並べて遊ぶ。		
2	・円、正方形、三角形の3型を型はめ板にはめる。		
2	・真似をして、縦線や横線を描く。		
2	・はさみを使って、紙、布を切る。		
2	・真似をして、円を描く。		

第 4 水 準	2	・手触りの同じ物を照合する。 (スベスベした物同士, ザラザラした物同士等)
	2	・聞かれると, 大小を区別して指さす。
	2	・聞かれると, 多い少ないを区別して指さす。
	2	・真似をして, 十字を描く。
	2	・3色程度の色を照合する。
	2	・数個一組の重ねおもちゃを順にいれる。
	2	・円, 正方形, 三角形の形とその図を照合する。
	2	・大きさが異なる5個程度の輪を大きい順に輪投げ棒へ入れる。
	3	・糊をつけて, 貼る。
	3	・2つの部分を一緒にして完全な形をつくる。 (2つの半円, 2片のパズル等)
	3	・聞かれると長短を区別して指さす。
	3	・聞かれると, 高低を区別して指さす。
	3	・真似をして, 3まで物を数える。
	3	・真似をして, V形を描く。
	3	・真似をして, 10まで物を数える。
	3	・手本どおりに積木やビーズを並べる。
	3	・手本を見て, ジグザグ等を描く。(〽等)
	3	・やり直さないで, 6片のパズルを完成させる。
	4	・はさみで, 簡単な形を切り抜く。
	5	・手本を見て, ひし形を描く。
5	・図に描いた簡単な迷路を解く。	
第 5 水 準	2	・言われると, 特定の本を捜す。
	2	・絵に描いた身近な物の名を数個言う。
	2	・乗り物ごっこ, ままごと等をよくする。
	2	・言われると, 物を別の物の(中に, 上に, 下に)置く。
	2	・音だけを聞いて, その物の名を言う。 (電話, 目覚し時計, 飛行機等)
	2	・絵や写真が表している動作を言う。
	3	・積木で, トンネル, 門の形をつくる。
	3	・鉛筆, クレヨンで丸を描く(1つの丸になっている)
	3	・顔らしい物を書いて, 目, 口等をつける。
	3	・木の実を集めて, 遊ぶ。 (どんぐり, くるみ, 松かさ等)
	3	・積木で, ままごとに必要な物をつくる。(家等)
	3	・砂を茶碗に入れて型を抜いたり, 砂で山をつくったりして遊ぶ。
	3	・自分で勝手な歌を考えて, うたう。
	3	・積木で, 車庫や線路をつくる。
	3	・消防車や救急車を想像して遊ぶ。
	3	・椅子や積木を使い, 運転の真似等して遊ぶ。
	3	・物が大きい小さいかを言う。
	3	・聞かれると, 自分・人形等の身体部位を10か所程度指さす。
	3	・聞かれると, 男の子と女の子を区別して指さす。
	3	・物が重い軽いかを言う。
3	・好きな物語やテレビ番組から, 2つの出来事について話す。(人物について話すこともある)	
3	・言葉と動作で指遊びを繰り返す。 (お父さん指どれ?→親指を出す等)	
3	・画用紙いっぱい絵を描いて, 色を塗る。	

第 5 水 準		(片隅に小さく描くだけではない)
	3	・紙飛行機を, 自分で折ろうとするが, 細かいところには無頓着で, 目的だけを達しようとする。
	3	・積木で長い線路や駅をつくり, 遊ぶ。
	3	・砂山に, トンネルをつくる。
	3	・木片に金槌で, 釘を打ちつけて遊ぶ。
	3	・ままごと遊びをして, 起きたり, 寝たり, 食事をしたり, 家庭的な活動をする。
	3	・一辺が10cm程度の正方形に対角線を描く。
	3	・真似をして, 正方形を描く。
	3	・聞かれると, 色の名を3つ程度言う。 (この積木は何色?)
	3	・○□△の形の名を言う。
	4	・材質が異なる物の手触りを言う。 (ザラザラ, スベスベ等)
	4	・手本を見て三角形を描く。
	4	・絵や写真にあったものを思い出して, 選び出したリ言ったりする。
	4	・科学図鑑等の絵を, 興味をもって見る。
	4	・砂場に池や川をつくり, 水を流したりして遊ぶ。
	4	・砂場の中に木片等を入れて, 線路や山をつくり, 車を走らせたりして遊ぶ。
	4	・色の名を8つ程度言う。
	4	・お金の名を3つ程度言う。(10円, 50円, 100円等)
	4	・文字, 数字, 標識等のシンボルを照合する。
	4	・物語を3回程度聞いて, 出来事を5つ程度思い出して言う。
4	・頭, 胴体, 四肢のそろった人物画を描く。	
4	・5行くらいの歌をうたう。	
4	・真似をして, 積木でピラミッドをつくる。 (積木は上から1, 2, 3, 4, …)	
4	・物が長い短いかを言う。	
4	・言われると, 物を別の物の(前, 後ろ, 横)に置く。	
4	・物を使って, 1~10迄の数合わせをする。 (置いてある個数と同じ数の物を置く)	
4	・1~20程度まで物を数える。	
5	・1~10迄の数字を読む。	
5	・小さな物を集めて, ためている。	
5	・自分の体について, 左右を区別して言う。 (右の手, 左の耳等)	
5	・五十音を順に言う。	
5	・自分の名前を平仮名で書く。 (姓は書けなくてもよい)	
5	・平仮名五十音のうち5文字程度を読む。	
5	・幅の広い順や長い順に物を並べる。(10個程度)	
5	・平仮名五十音を読む。	
5	・1~10迄の数字を順に並べる。	
5	・1番目, 2番目, 3番目という言葉の意味がわかり, 使う。	
5	・片仮名五十音を読む。	
5	・平仮名と片仮名の五十音を照合する。	
5	・1~25のうち言われた数字を指さす。	
5	・曜日を順に言う。	
5	・自分の誕生日を言う。(何月何日)	

第 6 水 準	5	・平仮名や片仮名で書かれた単語を10個読む。	
	5	・椅子や積木で、ベットや応接セット等をつくる。	
	3	・きれいな物を見ると、きれいだと感心する。	
	3	・3個以上の物で1対1の対応ができる。 (3人以上の人に物を1つずつ配る等)	
	3	・用途に関連した物2つを一緒にするか、聞かれるともう一方を答える。(紙と鉛筆等)	
	3	・カテゴリーで実物、絵、写真等を分類する。 (食べ物、乗り物、動物等)	
	3	・腕や脚の欠けた人物画に描き加えて完成させる。	
	3	・2つの物が同じか違うか言う。 (積木と積木、積木とコップ等)	
	4	・友達同士で、会話を交わしながら、何かをつくる。	
	4	・黒板に絵を描いて遊ぶ。	
	4	・言われた数だけ物を取る。(1～5程度)	
	4	・はさみと、糊を使って、紙で簡単な物をつくる。	
	4	・「昨日の続きをしよう」と言って、遊び始める。	
	4	・日常に関連した時間を言う。 (7時に起きる、9時に寝る等)	
	4	・500g以下の物を比べて、「より軽い」「より重い」と言う。	
	4	・見なれた物の色なら見なくても言う。 (りんごの色は何色?)	
	4	・絵の足りない部分を言うか、指さす。	
	4	・初め、まん中、終わりという言葉の意味が分かり使う。	
	水 準	5	・思った物を絵に描く。(電車、花、人等)
		5	・紙飛行機を、自分で折る。
5		・想像して、いろいろな物を描いて楽しむ。	
5		・20迄の範囲で物を数え、その数を言ったり、言われた数だけ物を取ったりできる。	
5		・3個までの物を使って、足し算と引き算をする。	
5		・よく飛ぶように、紙飛行機の折り方や飛ばし方を工夫する。	
5		・経験したことを絵に描く。	
5		・日常生活で、次にすることを予測する。 (お風呂に入った後で、歯を磨く等)	
5		・聞かれると、物の全部と半分を区別して指さす。 (1個のりんごと半分のりんご等)	
5		・1～100まで物を数える。	
準	6	・地図や地球儀を、見ることに興味をもつ。	
	6	・のこで、木を切る。	
	6	・絵の具で、絵を描く。	
	6	・レコードをプレイヤーにかけて、操作する。	
	6	・3つの不等辺六角形の型はめ板ができる。	
	6	・簡単な模型を自分でつくる。(プラモデル等)	
	6	・風船や、鶴を自分で折る。	
	6	・簡単な楽譜を見て、ピアノを弾く。	

4. 発達課題

ここでの課題は、さきの第1から第6水準の発達における発達課題を明らかにすることである。これによって、それらの課題と子どもが使用する教具を対応させながら整理することが可能となり、次に求められる課題とそれを促すための新たな工夫も生まれてくる。

こうして、「発達水準」「発達課題」「教具」の構造的な連関と発達論的な課題の追求が可能となってくる。

そこで、さきの宇佐川の文献から各発達水準の主な課題について整理した(表4)。

第1水準では、身体や皮膚への刺激を工夫してあたえることが中心的な課題となり、そこから次の運動の自発拡大に結びつけられていく。第2水準になると手を意図的に使わせていき、運動を方向づけ目と同調していくような働きかけが必要となる。第3水準では、さらに視覚・聴覚によって運動を調整していくための課題が考えられる。第4水準に入ると、知覚をより高めたり、ある程度の記憶を再現する課題などが可能となり、第5水準では、象徴機能の形成のための働きかけ、第6水準では、概念形成を高めるための課題が考えられる。

表4. 各発達水準における主な発達課題とその具体例

水準	発達課題	具 体 例
1	感覚受容の高次化	・前庭感覚や固有感覚への刺激 ・触覚、視覚、聴覚への刺激
2	運動表現の自発拡大	・垂直輪ぬき課題 ・注視から追視の課題
3	運動の停止と連鎖	・一方向輪ぬき ・物を大きな箱に入れる課題 ・一方向スライディングはめ板 ・一方向スライディングブロック ・二方向輪ぬき ・弁別的な箱入れ課題 ・弁別スライディングはめ板 ・多方向スライディングブロック ・みぞ付きなぞり板 ・ペグさし ・輪入れ課題 ・簡単なはめ込み課題 ・手先の運動課題
4	・視覚・聴覚による運動の制御と支配 ・知覚の高次化 ・記憶の高次化 ・模倣機能の高次化	・ひも通しの課題 ・巻いたり、たたんだり、表裏の理解の課題 ・強くつまむ活動 ・スプーン、箸、ピンセットを使う活動 ・はめはずしの課題 (マジックテープ、スナップ、ボタン等) ・回したり、ねじる活動 ・両手の協応を促す課題 ・描画活動 ・視覚が運動を制御しつづける活動 ・その他の高度な手の巧み性が要求されるもの ・色の弁別課題 ・形の弁別対応課題 ・形の構成課題 ・大小・高低・長短の系列弁別課題 ・空間の位置の把握課題 ・ボディ・イメージ形成のための課題 ・図と地の弁別と知覚の恒常性の課題 ・迷路課題
5	象徴機能の高次化	・ごっこあそびの組織化 ・物の代表性の成立のための視覚的分類学習 ・身振り表現と事物、絵カードとの結合 ・生活上よく経験している事物の上位属性分類や関係づけ ・言葉と事物や絵カードとの結合 ・言葉と身振り表現との結合 ・言葉と動詞カードとの結合 ・音楽(歌)と身振り表現との結合 ・歌をうたう
6	概念化の形成	・形や色など材質による分類課題 ・上位属性分類と関係づけ ・二次元属性分類 ・関係類推と反対類推 ・絵の欠陥指摘 ・時間系列化 (日常生活でよく経験している事柄の絵画配列) ・語の連鎖と構文理解ならびに産出 ・物の定義づけやなぞなぞ遊び ・数概念の形成 ・文字概念の形成

5. 市販教具の整理

つぎに、発達水準と発達課題に対して具体的にどのような教具が提示されなければならないかについて、実践現場で広く活用されている市販教具から整理することにした。資料として、ウチダ特殊教育カタログ、1986年度版をもちい、463点についておこなった。このことから、「発達水準」「発達課題」「教具」の関連を把握することが可能となってくる。

教具数を各水準ごとに見ると、第4・第5水準が圧倒的に多かった(表5)。この数は、複数の水準に使用されるものについては、重複している。その状態を詳しく見たものが表6表7表8である。このことから、単一水準でのみ使用されるものは、第4水準がきわめて多く、2つの水準にまたがるものは、第4・第5水準を中心として隣接した水準にまたがるものが多かった。また、3つの水準にまたがるものは、わずかで、さらに4つ以上の水準にまたがっているものは見られなかった。

これらのことから、今回整理した教具については、ほとんどが感覚と運動の統合がすすんだ第4水準以降に適するものであった。

表5. 各水準における教具数

発達水準	教具数
第1水準	20
第2水準	22
第3水準	98
第4水準	288
第5水準	217
第6水準	104
合計	749

表7. 使用される水準が二つ考えられる教具

発達水準	教具数
第1・2水準	1
第1・3水準	16
第1・4水準	1
第2・4水準	1
第3・4水準	48
第4・5水準	79
第4・6水準	7
第5・6水準	65
合計	218

表6. 使用される水準が一つと考えられる教具数

発達水準	教具数
第1水準	2
第2水準	20
第3水準	9
第4水準	120
第5水準	43
第6水準	17
合計	211

表8. 使用される水準が三つ考えられる教具数

発達水準	教具数
第3・4・5水準	19
第3・4・6水準	4
第3・5・6水準	2
第4・5・6水準	9
合計	34

6. 今後の研究にむけて

教具を収集・整理するためには、「発達水準」「発達課題」「教具」を対応させていき、有機的なつながりを見出すことが作業手順の最初でなければならない。そこで教具をとおして、いま必要とされる課題と次の課題の見直しができ、子どもの発達状態の把握が可能となってくる。教具の整理を進め、その全体構造がはっきりすれば、次にこれを改良し、新たに開発するさいにこれまでとはちがって、より子どもに適するものを作ることが容易になってくる。けれども、膨大な数の教具があるわけであるから、その最初の試みとして、市販教具の整理をおこないそのことをとおして、実践上の課題を明らかにしなければならないと考えた。そして今回の整理には、マイクロコンピューターを用いて、簡単に検索できるようにした。

教育現場では、重度・重複化し多様な生活の姿を見せている子ども達の発達上の課題や学習の問題は、むろん既存のものだけではそれを解決することが困難な場合が多い。そのため子どもの可能性を十分に伸ばしたいという教師の願いと努力から、さまざまなアプローチがなされつつ、新たな教具の開発が日夜くりかえされているのである。そこに日常の子どもにそくした発達課程の追求と貴重な実践事例や自作教具による教育的営為がある。

今後の課題としては、教育現場と結びつきを深めながらそうした資料を集めることが必要であるが、次のステップとして、養護学校・特殊学級など5校を調査しており、またこれらに関する文献も収集している。さらに今後、こうした事例や実践をとおしながら「発達水準」「発達課題」「教具」の具体的な対応関係をつかみ、構造をとらえるとともにそれらの関連を明らかにし、今後必要とされる各種分類のための基礎的作業をおし進めていかなければならない。

なお、繰返しになるがこれからの障害児教育実践にそくした教具の研究をより発展させるには、次のような課題があげられる。

- (1) 教具を固定的に考えるのではなく、子どもの発達の状態像にそくしていま必要な教具をつくりだすこと、そのことによって促された発達を根拠に、さらに教具の再創造が必要となってくる。
- (2) そうだとするならば、子どもの発達は教具とともにあるということになるし、教具が日常の子どもたちの生活の何をどんな形で作ったか、今後は詳細な記録と臨床と実践が問われることになる。

以上のことが、今後の我々の追求課題となるにちがいない。

謝 辞

本研究を進めるにあたって、各調査校ならびに数多くの方々に貴重な御指導・御助言をいただきましたことを心から感謝申し上げます。